

[資料] 宝永地震(1707年)と津波による大坂市中での被害数

— 26 史料による整理と比較 —

長尾 武*

Damage Figures from the 1707 Hōei Earthquake and Tsunami in Osaka City: Compilation and Comparison of Data from 26 Historical Documents

Takeshi NAGAO

Tennojicho minami 3-8-9, Abenoku, Osaka 545-0002, Japan

On Oct. 28, 1707 (Oct. 4 in the fourth year of Hōei), the Hōei earthquake (M8.6) occurred. It is still one of the most powerful earthquakes ever recorded in Japan. It is believed to have resulted from the simultaneous occurrences of the Tokai and Nankai earthquakes. Osaka City was seriously damaged by this earthquake and the subsequent tsunami. I compiled data in a table about damage caused by the Hōei earthquake and tsunami in Osaka City. I collected the data—collapsed houses and people crushed to death during the earthquake, plus damaged ships and river boats, collapsed houses and bridges, and drownings during the tsunami—from twenty-six documents. I classified seventeen of them into three groups of similar damage figures. The other nine documents each have differing figures and make up a fourth group. The figures in the documents would have probably been based on data from the Bugyosho (Magistrate's Office). However, these figures are different from those in "Ofure Oyobi Kudatsu" ("Official Notice and Verbal Notification") which the Bugyosho published. I believe one reason is that the Bugyosho's investigation included unpublished aspects—tenant's houses in back streets, for example, etc. Also, damage would have been lesser in early stages. Moreover, the exact number of drownings was not known even to the Bugyosho, which estimated them at 10,000. Many documents used other estimates.

Keywords: Historical earthquake, Hōei earthquake, tsunami, Osaka.

§ 1. はじめに

宝永四年十月四日(1707年10月28日)、午下刻～未上刻(午後1時頃)、わが国歴史上最大級の地震、M8.6の宝永地震が起こった。この地震では南海トラフのほぼ全域でプレートが一気に破壊された。家屋の倒壊は東海道から九州にまで及んだ。津波が伊豆半島から九州に至る太平洋沿岸、大阪湾・播磨・伊予・防長を襲った[宇佐美(2003)]。

近い将来、必ず起こるであろう南海トラフを震源域とする大地震に備えるためにも、過去の地震について、その被害を明らかにする必要がある。2011年の東日本大震災以後、歴史地震研究の最も大きな成果は北原・他(2012)である。また、最近、特に注目を集めているのは、宝永地震による大坂での死者数

21,000人以上という見解を発表した矢田(2013)であるが、「宝永地震による大坂の被害数を確実な史料を用いて論じている論文はほとんどない。」とし、確実な史料のみで宝永地震による大坂の被害を推定した研究には、西山・小松原(2009)があると述べている。そして、確実な史料として、柳沢吉保の公用日記である『楽只堂年録』と尾張藩士の執筆による3史料、天野信景による『塩尻』、朝日重章による『鸚鵡籠中記』、堀貞儀による『朝林』を採りあげている。矢田(2013)は、これらの史料を比較し、『朝林』に記載の大坂の被害数「竈数3,537、軒数(町役・役家)653軒、圧死者5,351人、溺死者16,371人」を最も正確な数値としている。筆者は近年、宝永地震による大坂市中での住家被害や震度について公表した[長尾(2012)]。矢田(2013)が正確とした被害数が最も正

* 〒545-0002 大阪市阿倍野区天王寺町南 3-8-9
電子メール: nagaotakeshi345@hotmail.com

確な数値なのか、他の史料の被害数とも比較して判断する必要があると考えている。本稿の目的は、宝永地震による大阪市中の被害数についての基礎資料の作成である。地震史料集などから、大阪市中の被害数値を記載している史料を管見する限り収集した。これら26史料によって、大阪市中での地震動および津波による被害数を一覧表で示した(表1)。また、被害調査項目についての説明や被害数値の傾向についての解説を加えた。

§2. 史料に記された宝永地震の被害数

宝永地震による大阪市中の被害数値を記載している26史料を収集した。これらの史料の被害数は大坂町奉行所が作成した調査史料が基になっていると考えられる。しかしながら、町奉行所が公表した『御

触及口達』の被害数値と諸史料の被害数値に違いがある。それには、次のような理由が考えられる。『大阪編年史』に所収の『御触及口達』には調査結果の全てが採録されていない。調査した時期の違いや調査項目が多様であったためと考えている。津波被害、特に溺死者数については、大坂町奉行所でさえ概数で示し、把握出来なかった。そのため、諸史料の溺死者数は実に様々で、差が大きい。

表1の26史料のうち、17史料(1)～(17)については地震動による被害数によく似た数値が見られる。これらを住家被害の近似性によって3グループに分類した。被害数値に近似性が見られない史料や住家被害を採り上げていない9史料(18)～(26)については表の最後の第4グループとした

表1 26史料に記録された地震動と津波による大坂での被害数

史料集に所収の史料について、史料集名を()内に略称で示し、該当頁も記載した。

- (編): 『大阪編年史・第7巻』(大阪市立中央図書館・大阪市史編集室編, 1969)
- (日): 『増訂大日本地震史料・第2巻』(文部省震災予防評議会編, 1941)
- (新): 『新収日本地震史料・第3巻別巻』(東京大学地震研究所, 1983)
- (随, 1981): 『日本随筆大成・別巻近世風俗見聞集・2』(森銑三・北川博邦監修, 1981).
- (随, 1977): 『日本随筆大成, 第3期・13』(日本随筆大成編集部, 1977)
- (名): 『名古屋叢書続編・第11巻』(名古屋市教育委員会編, 1968)
- (朝): 『共同研究報告書12・朝林後編』(朝林研究会編, 2010)
- (新大): 『新修大阪市史・史料編・第7巻』(大阪市史編纂所・大阪市史料調査会, 2012)

Table 1 Damage in Osaka City caused by the earthquake and tsunami as recorded in twenty-six documents.

史料名	地震動による被害			津波による被害				
	崩家数	竈数	死者数	破損落橋数	廻船破損数	川船潰破損数	潰家数	溺死者数
(1) 御触及口達 (編)p47-48	1,061軒	記載 無	534 男209 女325	橋数50	船数300艘	記載無	記載無	凡10,000余
(2) 名なし草A (編)p46-47	1,061軒 北579 南314 天168	記載 無	534 北278 南145 天111	記載無	記載無	記載無	記載無	記載無
(3) 浪速之震事 (編)p48-49	1,061軒 北579 南314 天168	3216	564 北308 南145 天111	落橋26	大小320余艘	記載無	大船に 押崩され潰家 603軒	凡7,000

(4) 大阪諸国大地震 大津浪並出火 (新)p370	1,061軒 北579 南314 天168	記 載 無	734 北278 南345 天111	橋数50	大小1,300余 艘	記載無	603軒	水亡人7,000 余 洪水にて 10,000
(5) 宝永地震記 (日)p151-152	1074ヶ 所 北570余 南344 天160余	記 載 無	542 北 286 南 145 天 111	崩高橋61 北 37 南 17 天 7	船高617艘 破損93 痛船336	上荷船400 新上荷船100 茶船300 劔先船150 土船7	記載無	記載無
(6) 摂陽奇観 (新)p360-361	潰家993 曲家781 計1,774	記 載 無	541 そのうち, 9溺死, 2他国者.	落 橋 31, 外に破損 14橋 計45橋	破損93艘 痛船336艘	863艘 (破損・潰707, 行衛不知156)	記載無	記載無
(7) 地震海溢考 十月 四日午下刻地震高汐 に付大坂町中並攝河 在々潰家・死人・落 橋・潰船等之覚 (新)p365	993軒 但 し , 土蔵・納 屋とも	記 載 無	541 男212 女329	落橋31 他 に 京 橋 ・ 日 本 橋 は 少 々 破 損 .	破船93艘	潰船707艘 但し, 大坂諸川船	記載無	外の書物に 12,030人
(8) 月堂見聞集 (随・1981)p47-48	630軒 (棟数)	10,620 余, 西 横堀よ り西で 多い.	打れ死人 3,620余	破損36, う ち31橋の 名を記す	破損500艘余	茶船・上荷船2,400 艘余	記載無	12,000
(9) 今昔地震津浪説 (新)p369	630軒 (棟数)	16,000	6,000	落橋36	記載無	記載無	記載無	12,000
(10) 江府京駿雑志 (新)p66-70	記載無	10,630 余	圧死 3,620	落橋35の うち, 30の 名を記す	大船780艘 (300-2,500 石積)	記載無	記載無	12,000
(11) 塩尻A (随・1977)p503-504	603軒	10,100 軒	圧死 3,620人	落橋22	大小650余艘	記載無	記載無	12,000余
(12) 宝永度大坂大地 震之記 (編)p50	潰家 603軒	10,600	死人 凡7,000	落橋26	320艘	記載無	記載無	12,000(地震 と津波)
(13) 宝永四年亥十月 四日大阪大地震之 事 (新)p369	603軒	10,600	打れ死人 3,620	落橋46	320艘	記載無	記載無	12,000
(14) 名なし草B (編)p47	家数603 軒	記 載 無	7,000余	橋数50余	舟数300艘	記載無	記載無	洪水にて 10,000
(15) 諸国大地震大津 浪一代記 (新)p366-377	603軒	10,600	打れ死人 3,620	落橋46	320艘	記載無	記載無	12,000

(16) 徳川実紀 (編)p49	記載無	10,600	3,020程	記載無	記載無	記載無	記載無	記載無
(17) 鸚鵡籠中記 (名)p250-251	記載無	16,000 余	3,630	記載無	記載無	記載無	記載無	12,100余
(18) 地震海溢考 大 坂大地震津浪之事 (新)p361-362	倒家数 513軒 北115 南236 天162		542人 北286 南145 天111 地震128 水死414	落橋22 北14 天8 南は記載 無	記載無	記載無	記載無	外の本に 12,000余人と あり
(19) 谷陵記 (日)p104-105	記載無	14,015 軒	記載無	落橋38	記載無	記載無	記載無	15,260(地震 と津波の死 者)
(20) 大地震之由来 (新)p63-65	980 軒	2万軒 余	10,061	落橋36外 ニ破損	記載無	凡800艘	記載無	橋の上にて 死人20,600
(21) 朝林A (朝)p285	記載無	3,537 町役 653軒	5,351	記載無	記載無	記載無	記載無	16,371
(22) 朝林B (朝)p284	記載無	記 載 無	記載無	記載無	記載無	記載無	記載無	死人合 16,000余
(23) 塩尻B (随・1977)p502	911ヶ所 北513 南236 天162	記 載 無	266 北 128 南 85 天 53	落橋36 北 14 南 16 天 6	記載無	記載無	記載無	数値の記載 無
(24) 楽只堂年録 (新)p31	崩家・納 屋・土蔵 共900軒	記 載 無	260人程	破 損・落 橋35-36	記載無	記載無	記載無	記載無
(25) 基熙公記 (日)p101	記載無	民屋5 分1崩	記載無	記載無	記載無	記載無	記載無	河口大船中 にある者等 25,000人許 死
(26) 地震川筋見分 所・損所覚 (新大)p376-384	記載無	記 載 無	記載無	落橋25	記載無	記載無	記載無	記載無

史料(1)～(26)についての注釈: (1)町奉行所によって公表された被害数。(2)死者数は各組別に男女数を記しているが省略した。(3)死者数は各組別に男女数を記しているが省略した。(4)死者数の組別数値が他の史料と著しく異なる。(5)崩高橋159とあるが、組別の合計は61橋である。修正した。(6)浜松歌国の随筆、文化～文政年間(19世紀初)に執筆された。(7)十月十三日の日付。(8)本島知辰による元禄十～享保十九年(1697～1734)における見聞集、十月十二日の記録。(9)編者・成立年代は不明。(10)金沢藩士・今枝直方による記録。崩家16,030軒は竈数とした。(11)尾張藩士天野信景による随筆。(12)十月十日迄の記録。死者は地震・津波の区別無。(13)十月十一日迄の記録。(14)名なし草に所収、(2)とは別の出典による。(15)亥十月四日大坂大地震之日記帳より抜書之写、十月十一日迄の記録(16)江戸幕府の記録。家康～10代家治までを記録、文化六年起稿、嘉永二年(1849)完成。(17)尾張藩士朝日重章の日記。十月十日迄の記録。(18)崩家数の組別数値が他の史料と著しく異なる。(19)奥宮正明による記録。宝永四年に執筆。(20)大坂与力からの書付(十月十八日着)を写している。(21)尾張藩士堀貞儀による記録。十月十日迄の被害数。(22)尾張藩士堀貞儀による記録。大坂の別の被害記録である。十月二十二日の日付。(23)尾張藩士天野信景による随筆、既述の(11)とは別の出典による記録。(24)柳沢吉保による公用日記。大坂の被害については十月五日頃の記録。(25)近衛基熙の日記(寛文五～享保七年・1665～1722)。(26)町奉行所役人による市中河川の損所調査と水上交通復旧の為の差配を記録。十月五～十三日迄の記録。

2.2 地震動による被害数

26史料に記載の地震動による被害数について項目別に示した。

2.2.1 住家被害

住家被害の調査項目には、崩家数(全壊した表屋敷の数)、竈数(かまどかず;世帯数,民家の数)の2種類がある。倒家・崩家・潰家の表記の違いはあるが、いずれも全壊と考えている。

(1)崩家数(全壊した表屋敷の数)

家数とは表屋敷の数であり、家持の屋敷である。

棟数として記載している史料もある。

513軒(倒家)・・・『地震海溢考 大坂大地震津浪之事』(組別数値が他史料と異なる)

603軒・・・『塩尻A』など5史料。

630軒(棟数)・・・『月堂見聞集』など2史料

900軒(納屋・土蔵共)・・・『楽只堂年録』

911ヶ所・・・・・・・・・・・・・・・・『塩尻B』

980軒・・・『大地震之由来』

993軒・・・『地震海溢考 十月四日・・・』

1,061軒・・・『御触及口達』など4史料

1,074ヶ所・・・『宝永地震記』

1,774軒・・・『撰陽奇観』(潰家993・曲家住家ならざる分781)

『御触及口達』の1061軒は町奉行所によって公表された表屋敷の被害数である。『名なし草A』などの3史料も同数であるが、各組別に被害数が記載されている。『塩尻B』911ヶ所、『宝永地震記』1074ヶ所は、軒でなく、ヶ所で示されているが、軒と同じと考えて良いであろう。

『月堂見聞集』など2史料、『塩尻A』など5史料のうち4史料、計6史料では竈数も記載されている。

『地震海溢考 大坂大地震津浪之事』では倒家数が、北組115軒、南組236軒、天満組162軒、計513軒で、北組が三郷中最も少ない。組別に崩家数を記載している6史料のうち、5史料では北組の崩家数が最も多い。

(2)竈数(全壊した民家の数)

竈数とは借家も含めた民家の数である。『御触及口達』には記載されていないが、多くの史料が竈数を記述している。(1)で述べた崩家数(表屋敷の数・家持の屋敷数)よりも、被害状況をより大きな数値で示している。

3,216・・・・・・・・『浪速之震事』

3,537(此町役653軒)・・・・・・・・『朝林A』

10,100・・・・・・・・『塩尻A』

10,600・・・・・・・・『徳川実紀』など4史料。

10,620余・・・『月堂見聞集』

10,630余・・・『江府京駿雑志』(崩家10,630軒余と記載しているが、竈数と考えられる。)

16,000・・・・・・・・『鸚鵡籠中記』など2史料。

20,000余・・・『大地震之由来』

民屋の5分1が崩れる・・・『基熙公記』

『浪速之震事』、『朝林A』が3,000台である。『朝林A』には「此町役653軒」という文言が加筆されている。前記2史料以外の他の史料は、竈数1万以上である。10,100～10,630に7史料が集中している。

近衛基熙の日記、『基熙公記』の「民屋5分1が崩れる」は詳細な数値では無いが、被害の大きさの目安となるだろう。

2.2.2 死者数(打たれ死人・圧死者)

史料では、地震動による死者と津波による死者とが区別されている。

260・・・『楽只堂年録』

266・・・『塩尻B』

534・・・『御触及口達』など2史料。

541・・・『撰陽奇観』(内、9人は溺死・2人は他国者)『地震海溢考 十月四日・・・』

542・・・『宝永地震記』

564・・・『浪速之震事』

734・・・『大阪諸国大地震大津浪並出火』(死者数の組別数値が他史料と異なる)

3,020・・・『徳川実紀』

3,620・・・『月堂見聞集』、『塩尻A』など5史料

3,630・・・『鸚鵡籠中記』

5,351・・・『朝林A』

6,000・・・『今昔地震津浪説』[表1(9)]

7,000・・・『名なし草B』

10,061・・・『大地震之由来』

『御触及口達』の死者数534人、『名なし草A』は同じ534人であるが、組別に記載され、北組278人、南組145人、天満組111人である。『宝永地震記』、『浪速之震事』の2史料では北組の死者数に若干の違いがあり、合計数に少し差がある。

『大阪諸国大地震大津浪並出火』は、北組278人、南組345人、天満組111人で合計数が734人で、前記3史料より約200人多い。北組・天満組は前記の3史料とほぼ同数であるが、南組だけ200人多くなっている。組別の死者数が記載されている6史料の中、他

の5史料では北組の死者が最も多い。

『撰陽奇観』541人では、その内530人は人別帳に記載の者である。9人は津波による溺死者、2人は他国者である。

『地震海溢考 十月四日・・・』は541人で同数だが、前記のような内訳の記載は無い。

打たれ死人(圧死者)数は、身元が確認できなかった者を含めた死者数と考えられる。3,620人とする史料が5史料、3,000人台が全部で7史料である。

2.3 津波による被害

津波による被害について、廻船数や川船数については、大坂町奉行所の調査が基になっていると考えられるが、溺死者数については、町奉行所でさえ把握出来ず、概数で示している。

2.3.1 廻船・破損数

海上交通の要衝であった大坂は、津波によって大きな被害を受けたが、特に船の被害が大きかった。多数の史料が、廻船の被害を記録している。

破船93艘・・・『地震海溢考 十月四日・・・』

破損93艘、痛船336艘・『宝永地震記』と『撰陽奇観』

船数300艘・・・『御触及口達』と『名なし草B』

破損320艘・・・『浪速之震事』など4史料。

破損500艘余・・・『月堂見聞集』

破船大小650余艘・・・『塩尻A』

大船の損780艘(300～2,500石積)・『江府京駿雑誌』

船数大小1,300余艘・・・『大阪諸国大地震大津浪並出火』

破損船数が最も多いのは『大阪諸国大地震大津浪並出火』の1,300余艘である。この史料の記述に大小様々とあるので、川船などの小さい船も含まれていると考えられる。

『御触及口達』と『名なし草B』は船数300艘であり、破損程度は不明である。『浪速之震事』など4史料が320艘である。

『宝永地震記』と『撰陽奇観』は被害程度を詳細に記録している。船高617艘、破損93艘、痛船336艘とあるが、617艘は大坂市中の河川・堀川へ入り込んだ船数と考えられる。

2.3.2 川船の潰破損数

廻船の破損については多くの史料が記述しているが、川船の潰破損数について記録しているのは3史料のみである。『撰陽奇観』は破損・潰船707艘、行

衛不知船156艘、合わせて863艘である。『地震海溢考 十月四日午下刻地震高汐・・・』は潰船707艘である。『宝永地震記』は上荷船400艘、新上荷船100艘、茶船300艘、剣先船150艘、土船7艘、合計957艘である。

2.3.3 津波による潰家数

26史料中、津波による潰家数を記録しているのは、2史料だけである。その理由は、地震による潰家に比べて少なく、また地震による被害と区別しにくい点があげられる。

『浪速之震事』に、「大船にて押崩され、潰家603軒」とあり、川岸の建物に大船が舳先を突っ込んで、突き崩したのであった。津波が直接家を破壊するほどの高さでは無かったといえる。津波による潰家数は2史料とも603軒である。

2.3.4 溺死者数

7,000人・・・『浪速之震事』

10,000人・・・『御触及口達』と『名なし草B』

12,000人・・・『月堂見聞集』など7史料

12,030人・・・『地震海溢考 十月四日・・・』

12,100人・・・『鸚鵡籠中記』

16,371人・・・『朝林A』

17,000人(水亡人7,000人、洪水にて10,000人)・・・

『大阪諸国大地震大津浪並出火』

20,600人(橋の上にて死人)・・・『大地震之由来』

25,000人(大船中で死人)・・・『基熙公記』

諸史料の溺死者数は概数で記載され、推定した数値であるが、『朝林A』だけは1桁の位まで人数を記載し、16,371人である。26史料中、10,000～12,100人とする史料が11史料で最も多い。

・溺死の原因 『鸚鵡籠中記』は次のように述べている。「地震後、浜近所の輩・・・皆々船に乗り・・・申半刻高浪来たりて、川口にかけ置たる大船、高浪に乗して矢の如くに来る。此船の下へ人の乗たる小船皆入て圧れ溺死する也。或は地震の節、橋等渡りかかりて死するもあり。」地震を恐れて船に逃れた人々が津波で遡上してきた大船の下敷きとなったこと、または、橋を渡っていた人が亡くなったとしている。

2.3.5 落橋・破損橋

津波による橋梁の被害について、多くの史料が道頓堀川では日本橋より西の橋が全て落橋したと記述しており、道頓堀川で8橋落ちたことは確実である。し

かし、それ以外の河川や橋については、記述も少なく、また、記述に違いがあり、落橋名を確定することが困難であった。先行研究では西山(2005)が、金沢藩士・今枝直方による記録である『江府京駿雑志』によって、30の落橋名を地図で示している。近年、大阪市史編纂所・大阪市史料調査会(2012)が、宝永地震に関する新史料を公表した。大坂町奉行所の与力・同心が市中川筋における津波被害を調査した『地震川筋見分所・損所覚』である。この史料には、市中河川における25の落橋名が記載されている。落橋数は『江府京駿雑志』より少ないが、落橋と破損との違いの判断については、諸史料と比較して最も正確と考えられ、信頼できる。ただし、この史料は、紙背文書として発見されたもので、十月五日から同月十三日迄の記録である。市中の河川を巡検しており、河川別の落橋名は全部記載されているように思われる。まず、諸史料に記載の落橋数・破損橋数を概観した後、『地震川筋見分所・損所覚』によって落橋名を紹介する。

(1) 諸史料に記載の落橋・破損橋数

史料により、落橋数、破損橋数などの調査基準の違いがある。落橋、破損橋かの違いが注記されていない史料もある。

落橋22橋・・・『塩尻A』など2史料

落橋25橋・・・『地震川筋見分所・損所覚』(25落橋名を記載)

落橋26橋・・・『宝永度大坂大地震之記』

落橋31橋・・・『撰陽奇観』(落橋31, 外に破損14橋), 『地震海溢考 十月四日・・・』

落橋35橋・・・『江府京駿雑志』(落橋30橋名を記載)

破損36橋・・・『月堂見聞集』(破損31橋名を記載)など4史料。

破損・落橋35～36橋・・・『楽只堂年録』

落橋38橋・・・『谷陵記』

落橋46橋・・・『宝永四年亥十月四日大阪大地震之事』, 『諸国大地震大津浪一代記』。

橋数50橋・・・『御触及口達』など3史料。

崩高橋61橋・・・『宝永地震記』

落橋・破損橋の橋数について、諸史料は22～61橋と様々である。『御触及口達』など3史料では橋数50とあり、落橋数か破損橋数かの記載がない。他の史料の被害数と比べてみて、破損橋数と考えられる。

(2) 『地震川筋見分所・損所覚』に記載の落橋名

この史料は、撰津国西成郡高畑村北後家文書に含まれる慶応四年辰正月吉日「当辰之諸事入用勘

定覚帳」の紙背文書である。史料の表題として、「宝永四年十月五日ヨリ 地震川筋見分所・損所覚 并流船片付一件」とあり、役人として2名の与力、大森次郎兵衛、小泉伊左衛門と同心と思われる4名、平蔵、十郎兵衛、弥次左衛門、利介の名前が記載されている^{注)}。十月五日から十三日迄の記録が採録されている。津波による河川橋梁の被害状況を調査し、船舶の往来を妨げている船舶や材木の取り除き、川浚えを差配した記録である。この史料には河川別に25の落橋名が記載されている。道頓堀川や堀江川のように複数の落橋があった橋名は下流から順次上流に向かって、正確に記載されている。ただし、1箇所明らかかな誤りがある。高橋と新玉造橋(玉造橋のこと)を立売堀川の橋としているが、長堀川の橋である。立売堀川が木津川に合流する地点にも同名の高橋があるため、誤記したのかも知れない。或いは、原本には正しく記載されていて、転写の際に誤写したのかも知れない。表2に、落橋名(1)～(25)を示す。また、図1の大坂図に、落橋した橋の位置を示す。

注) 大阪市史編纂所(1985)から、2名の与力の姓名が確認できる。4名については姓の記載が無く、未確認であるが、同心と思われる。

表2 史料に記載された落橋名

Table 2. Completely collapsed bridges as recorded in "Notes from Examinations of Earthquake [Tsunami] Damage Along Rivers in Osaka City".

河川名	『地震川筋見分所・損所覚』に記載の落橋名
道頓堀川	8橋 (1)日吉橋 (2)汐見橋 (3)幸橋 (4)住吉橋 (5)大黒橋 (6)戎橋 (7)相合橋 (8)太左衛門橋
西横堀川	1橋 (9)金屋橋
堀江川	5橋 (10)水分橋 (11)鉄橋 (12)瓶橋 (13)高台橋 (14)隆平橋
長堀川	2橋 (15)高橋 (16)新玉造橋(玉造橋)
立売堀川	上記2橋を立売堀川の橋と誤記。本表では長堀川の2橋に修正した。
江戸堀川	1橋 (17)西北橋
木津川	1橋 (18)亀井橋
安治川	1橋 (19)安治川橋
古川	1橋 (20)国津橋
逆川	1橋 (21)芦分橋
土佐堀川	2橋 (22)湊橋 (23)越中橋
堂島川	1橋 (24)船津橋
曾根崎川	1橋 (25)汐津橋
合計	25橋



図1 大坂図(元禄十六年・1703年).

大阪市参事会(1912)所収付図のコピーに加筆した。(1)~(25)は落橋した橋.

Fig. 1. Collapsed bridges in Osaka City (numbered 1 to 25). Map of Genroku-period (Edo era) Osaka City originally from “Osaka City History”, published in 1912.

§ 3. おわりに

大阪市中の被害数値を記載している26史料によって、大阪市中での地震動および津波による被害数を一覧表で示した。さらに、被害項目別に、多くの史料が記録している被害数や、他の史料と被害数が著しく異なっている史料を指摘した。本稿で示した資料が、宝永地震による大阪市中での被害数を推定する一助と成れば幸いである。

謝辞

文献・史料に関して、大阪府立中央図書館、大阪府立中央図書館、同中之島図書館、大阪市立大学図書館を利用し、各館の職員様からご教示を賜りました。2名の匿名の査読者と歴史地震編集委員長金田平太郎氏から貴重なご意見を賜り、本稿を改善することができました。英語訳について、Jeremy Larsen氏から援助を賜りました。お世話になりました皆様に深く御礼申し上げます。

対象地震：1707年 宝永地震

文献

- 朝林研究会編，2010，共同研究報告書12，朝林後編，名古屋学芸大学短期大学部地域文化研究センター，284-287.
- 北原糸子・松浦律子・木村玲欧編，2012，日本歴史災害事典，吉川弘文館，838pp.
- 文部省震災予防評議会編，1941，増訂大日本地震史料，2，震災予防協会，754 pp.
- 森銑三・北川博邦監修，1981，続日本随筆大成，別巻，近世風俗見聞集2，月堂見聞集，吉川弘文館，1981，333pp.
- 長尾武，2012，宝永地震(1707)における大坂三郷(北組・南組・天満組)での崩家率，歴史地震，27，15-26.

- 名古屋市教育委員会編, 1968, 名古屋叢書, 続編11巻, 鸚鵡籠中記, 名古屋市教育委員会, 657pp.
- 日本随筆大成編集部, 1977, 日本随筆大成, 第3期 13, 塩尻, 吉川弘文館, 528pp.
- 西山昭仁, 2005, 安政南海地震における大坂での震災対応, 1854年 安政東海地震・南海地震報告書, 中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会, 42-67.
- 西山昭仁・小松原琢, 2009, 宝永地震(1707)における大坂での地震被害とその地理的要因, 京都歴史災害研究, 10, 13-25.
- 大阪市立中央図書館大阪市史編集室編, 1969, 大阪編年史, 7, 大阪市立中央図書館, 480
- 大阪市参事会, 1912, 大阪市史, 付図 (復刻版, 1979, 清文堂出版).
- 大阪市史編纂所, 1985, 大阪市史史料, 13輯, 大阪市史料調査会, 155pp. 大阪市史編纂所, 1985, 大阪市史史料, 13輯, 大阪市史料調査会, 155pp.
- 大阪市史編纂所・大阪市史料調査会, 2012, 新修大阪市史, 史料編7, 大阪市, 894pp.
- 東京大学地震研究所, 1983, 新収日本地震史料, 3・別巻, 日本電気協会, 590 pp.
- 宇佐美龍夫, 2003, 最新版日本被害地震総覧 [416]-2001, 東京大学出版会, 1985. 605pp.
- 矢田俊文, 2013, 1707年宝永地震と大坂の被害数, 災害復興と資料, NO.2, 118-122.